

## マルコ1章35－39節 「必要が押し寄せてくる時」

### 1A 夜明けの祈禱 35

1B 愛する父との交わり

2B 寂しい所での休養

### 2A 人々の必要 36－37

1B 想定外

2B 常識的

### 3A 福音宣教 38－39

1B 福音中心の働き

2B 任された全域への働き

## 本文

マルコによる福音書 1 章をお開きください、私たちの学びはついに、次の福音書、マルコ伝に入ります。午後に 1 章全体を眺めますが、今朝は 35-39 節に注目します。「**35 さて、イエスは朝早く、まだ暗いうちに起きて寂しいところに出かけて行き、そこで祈っておられた。36 すると、シモンとその仲間たちがイエスの後を追って来て、37 彼を見つけ、「皆があなたを捜しています」と言った。38 イエスは彼らに言われた。「さあ、近くにある別の町や村へ行こう。わたしはそこでも福音を伝えよう。そのために、わたしは出て来たのだから。」39 こうしてイエスは、ガリラヤ全域にわたって、彼らの会堂で宣べ伝え、悪霊を追い出しておられた。」**

私たちは、前々回、イエス様がガリラヤにおいて、弟子たちに大宣教命令を出して、あらゆる国の人々を弟子としなさいという命令を彼らが受けたところを学びました。それはまさに、イエス様が、同じガリラヤで行われていたことを、弟子たちが聖霊の力によって行いなさいという命令に他なりません。自分たちがどうして、イエス様のように言葉にも力にも偉大な働きをすることができるのか？と弟子たちは思ったと思います。けれども、イエス様は、「見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。(マタイ 28:20)」と言われました。弟子たちが自分たちの力で行なうことではなく、聖霊の力によって行うことであり、イエス様が共にいて、イエス様が自分たちを通して行ってくださることです。

時は、イエス様がカペナウムの会堂で、御言葉を語られた後に、悪霊を追い出されました。それからすぐに、ペテロの家に行かれて、そこでペテロの姑が熱を出していたのを癒されました。その悪霊追い出しや、病を治されたのを知って、安息日が終わった日没後に、どどっと病人や悪霊につかれた人を、カペナウムの人々が連れて来たのです。ですから、夜の間ずっとイエス様はその働きをしていたものと思われます。今朝は、そのような働きをしていたイエス様が、カペナウムから

他の町や村に行って福音を伝えようと言われている部分です。

これだけの必要があるのだから、どうして他のところに行こうとするのか？と思われるかもしれませんが。逆のことを、イエス様はしておられるのではないか？必要があるのに・・と思われるかもしれませんが。しかし、一見、「必要があるのに、それを敢えて満たさない」ように見える決断をしなければいけないことがあります。むしろ、人々は真面目に、「必要があるのだから、それを行わなければいけない」という、過度な使命感で押し潰されていることがあるのではないのでしょうか。大学病院で働くお医者さんや看護師さんたちは、とてつもない重労働であると聞きます。その歪みから、女医には勤まらないとして、ある大学では不正に入学試験で、女子だけを一律に点数を下げたりしました。キリスト者の働きで、例えば、地震や台風、津波などで援助する人たちが、燃え尽きてしまい、その後、かなりの精神的な後遺症が残っている人たちもいます。必要が本物で、自分がそれを満たす能力や時間があればそれだけ、それを断ることはとても難しくなります。けれども、イエス様は敢えて、その場所とその時を避けられました。一見、冷たく酷く見えるような決断の中にある、神の御心を見つめていきたいと思います。

### 1A 夜明けの祈禱 35

悪霊を追い出し、病人を数多く治されたその夜、イエス様は、睡眠時間を削ってでも、朝焼けになる前にしておかなければいけないことがおありでした。祈りでした。「**イエスは朝早く、まだ暗いうちに起きて寂しいところに出かけて行き、そこで祈っておられた。**」とマルコは書き記しています。イザヤは、メシアが主のしもべとして朝ごとに神に聞く姿をこのように預言しています。「50:4【神】である主は、私に弟子の舌を与え、疲れた者をことばで励ますことを教え、朝ごとに私を呼び覚まし、私の耳を呼び覚まして、私が弟子として聞くようにされる。」朝ごとに、主なる神がしもべに教えられ、弟子のようにして聞いて、その言葉をもって疲れた人を励ますようにするのだということです。そして、イエス様の宣教は祈りによって進み、十字架への道も祈りによって心を決めました。

祈りには、いろいろな種類の祈りがあります。私たちが教会において捧げる祈りは、公の祈りと呼んでよいものでしょう。「あなたがたのうち二人が、どんなことでも地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父はそれをかなえてくださいます。二人か三人がわたしの名において集まっているところには、わたしもその中にいるのです。(マタイ 18:19)」ですから、人の前でも、互いに同意して祈れるように、声を出して祈ることは、正しいことです。

### 1B 愛する父との交わり

しかしこういった祈りだけではなく、イエス様は、「天の父に聞いていただく祈り」として、独りだけの祈りを教えておられます。「あなたがたが祈るときは、家の奥の自分の部屋に入りなさい。そして戸を閉めて、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたところで見られるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。(マタイ 5:6)」人に聞こえるように祈るので

はなく、むしろ天の父に聞いていただくことがはっきり分かるように、そういった奥まったところで祈りなさいという勧めもあるのです。イエス様が行なわれているのは、そのような独りで祈られる祈りなのです。

イエス様は、バプテスマをヨハネから受けられ、その時に天から声がしました。「1:11 あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」イエス様は、父なる神からこよなく愛されていることを知っておられました。使徒ヨハネは、「ヨハ 3:35 父は御子を愛しておられ、その手にすべてをお与えになった。」と言いました。イエス様ご自身が、御父から愛されていることを知っておられ、それで、その方と時を過ごしたいと願われていました。御父と御子との間にある交わりです。そしてイエス様は、ご自分の名によって、私たちが今度は、その御父と御子にある交わりの中に導きたいと願われています。「1ヨハ 1:3 私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。」ですから、私たちが神に、またイエス様にどれほど愛されているのか、それを知るためには、この方の前に行かなくてはならないでしょう、そのためには、独り、誰もいないところでこの方と時間を過ごす必要があるのです。

私たちは忙しい社会に生きています。朝起きれば、何かをしなければなりません。その忙しさは、決して特別なことではありません。実は、田舎の農家においても、朝から晩までとても忙しい一日を過ごします。私の知人で、モンゴル旅行をした兄弟がいますが、そこで遊牧をしている一家でホームステイしました。朝からずっと、忙しいのだそうです。しなければいけないことは、数多くあります。イエス様が、ご自分の働きを始められたら、一気に忙しくなりました。それで、敢えて祈りの時間をお造りになられたのです。宗教改革者のルターが残した名言があります。「今日私は忙しいから、今朝私はいつもより3時間多く祈ろう。」そう、忙しいということは、それだけ神に頼り頼まなければいけないが増えているということです。そうであれば、祈るべきこともそれだけ増えるのですから祈る必要があるでしょう。それだけ動いているのですから、しっかりと父なる神とだけ交わりを増やしていく必要があるでしょう。

## 2B 寂しい所での休養

そして、こうした祈りは私たちに魂の休息を与えてくれます。「マタイ 11:28 すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」人と会う時、特に主の働きをしている時に、人と会う時には、私たちは少しずつ自分の魂に負荷をかけています。イエス様ご自身が、この言葉を語られたのは、カペナウムとベツサイダとコラジンが、もっともイエス様の働きによる恩恵を受けていたのに、福音を聞き入れなかった直後のことです。イエス様は、彼らが拒んでいるので、神からの裁きは免れないことを宣言されました。しかし、その後ですぐに父なる神に祈られているのです。そして、こう言われているのです。「11:27 すべてのことが、わたしの父からわたしに渡されています。父のほかに子を知っている者はなく、子と、子が父を現そうと心に定めた者のほかに、父を知っている者はだれもいません。」ご自分に与えられてい

る人々が事実おり、与えられていない人々のことは、父に任せればよいことを知りました。

私たちは、責任感から、自分のしていることに応答しない人たちのことで悩んでしまいます。その責任が負えなくて、押しつぶされそうになります。人と接する時には、いつの間にか、その責任感のバランスで、自分が負わなければいけないものを、実際よりも自分で背負ってしまっているため、疲れを覚えるのです。けれども、イエス様は、はっきりと、自分に与えられていることはそれほど多くはない、与えられている人々のことについて神に感謝しなさい。そして悟ることのできた人は、自分が悟らせたのではなく、父なる神がそうさせたからなのだとということです。そのことを喜び、感謝する時に、自分の魂はただ神の御手に委ねられていることを知り、休まるのです。

## 2A 人々の必要 36-37

そうやってイエス様は祈っておられた時に、ペテロがやって来ました。「36 **すると、シモンとその仲間たちがイエスの後を追って来て、37 彼を見つけ、「皆があなたを捜しています」と言った。**」

### 1B 想定外

イエス様が、時間を造って父なる神に祈っておられたのに、それでも、このように人々がやって来ます。これが生活の現実です。小さな子を育てておられるお母さん、お父さんはいかがでしょうか？ 落ち着いて、ご飯を食べたことのある日は、どのくらい前のことでしょうか？ ゆっくりとしようと思った瞬間、何か子供たちがしでかします。イエス様も、同じように群衆がご自身のところにやって来ました。そして弟子たちも、その押し寄せる群衆をどうすることもできず、ペテロを始めとして、どうすればよいのか、助けを求めに来ています。

### 2B 常識的

そして、ペテロは、「**皆があなたを捜しています**」と言っています。彼は、とても真面目に問いかけました。先に話しましたように、その問いかけは本物の必要に基づいています。悪霊につかれています。病の中に伏している人々がいます。そうした人々がいるのだから、助けるのは当然だろうというのが、当たり前なのです。しかし、私たちが、常識であるとか、当たり前だという決めつけや思い込みから、時に自分自身を引き離さないといけない時があります。

## 3A 福音宣教 38-39

### 1B 福音中心の働き

イエス様は、「38 **イエスは彼らに言われた。「さあ、近くにある別の町や村へ行こう。わたしはここでも福音を伝えよう。そのために、わたしは出て来たのだから。」**」と言われました。カペナウムの町は離れて、近くにある別の町や村に行こうと言われています。その理由は、「**わたしはここでも福音を伝えよう。そのために、わたしは出て来たのだから。**」ということです。つまり、言い換えると、カペナウムでこれ以上、癒しや悪霊追い出しをしても、福音のためにはならないということです。

人々の中で、イエス様の語られる福音、神の国が近づいているという福音が関心事ではなくなっていたのです。言うなれば、「ただで治してもらえる病院」みたいな感じで、イエス様のところに来ていたのです。イエス様が五千人の給食をされた次の日に、群衆がいつまでもついて来ていたのですが、イエス様ははっきりと彼らに言われました。「ヨハ 6:26 まことに、まことに、あなたがたに言います。あなたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからです。」その目的が、変わっているのです。

イエス様が、なぜ病を治されたのでしょうか？悪霊を追い出されたのでしょうか？マルコの福音書の最後に書いてあります。「16:20 弟子たちは出て行って、いたるところで福音を宣べ伝えられた。主は彼らとともに働き、みことばを、その伴うしるしをもって、確かなものとされた。」主の語られるみことばに伴う徴であります。みことばが確かなものであることを示すために、悪霊を追い出され、そこに権威があることを示されました。ですから主体は御言葉であり、悪霊を追い出すことや、病を治すことではなかったのです。しかしカペナウムの人々は、福音である神ご自身、イエスご自身を求めるのではなく、その徴を求めていたので、イエス様はそこを離れて、使命に集中しようとお考えになったのです。

私たちが、最も大切にしなければいけないことは、「主のみこころを行う」ことです。主に与えられた使命を果たすことです。主のしもべであり、その言いつけられたことを行うのです。イエスご自身が父なる神に対して、そのような姿勢でした。「ヨハ 5:30 わたしは自分の意志ではなく、わたしを遣わされた方のみこころ求めるからです。」主から命じられたことを行うまでのことであり、それ以外のことは、どんなに自分が必要があると感じても、それを行わないでいるのです。私たちの周りには、あまりにも数多くの必要があります。それらを満たそうとしても、それが父なる神から与えられた使命でなければ、やらないほうがよいのです。

私たち人間は、弱い者、肉の中にいる者です。初めは主に命じられて行なっているとしても、それがいつの間にか違う目的に変わっていることがあります。例えばある病院に、多くの患者がいて、そこに常連さんがいるとします。その人は、病が治ることを目的にしているのではなく、そこにいるお医者さんや看護師さん、働いている人と仲良くなって、会話をしたいから受診しているとするでしょう。初めは本当の必要があって来ているのですが、いつの間にか同じことをしていても、動機が変わってしまっているのです。私たちが、同じことをしているとそのような問題が起こります。表だけでは、クリスチャンとしての活動はしているかもしれない。教会として活動はしているかもしれない。けれども、それが大宣教命令を守ると言う動機ではない、ただ前にやっていたからとか、ただ漫然と活動をしていただけであるとか、そしてそうした活動をこなすことが目的になってしまったら、イエス様のように大胆に、止める勇気も必要です。そして、初めに与えられた目的を果たすために、改めて初めの行いをしていく必要があります。

## 2B 任された全域への働き

そして、「39 こうしてイエスは、ガリラヤ全域にわたって、彼らの会堂で宣べ伝え、悪霊を追い出しておられた。」とあります。ガリラヤ地方の全域に伝えています。まだまだ、福音を聞くべき人々はいるのです。イエス様は、ガリラヤにて闇の中の光になるように神に言われていて、それでガリラヤの町々、村々を巡られました。私たちも、同じように召されています。もうこれでよいだろう、ではなく、私たちの周りには数多くの人々がいます。いろんな人々がおられます。その人たちが、新たに教会に集うことができるように祈ります。また別の人が来られます。このようにして、いつか留まるのではなく、新たな人々が与えられるよう祈り、また動くべきです。過去に留まってはいけない、今、主から与えられていることに集中します。

ですから、必要が迫っている時に、私たちは祈ります。忙しい時にむしろ、祈りを増やすぐらい、祈りの時間を大切にします。次に、福音を使命とすることです。どんなに常識的に見えても、自分の使命を第一にする勇気が必要です。それから、過去に固執するのではなく、主が与えておられる新しい領域に私たちは絶えず動く必要があります。